

## エジプト人日本語学習者のポライトネスストラテジー の使用実態

**Lina abd Elhamid Ibrahim Ali\***

[linaali59@hotmail.com](mailto:linaali59@hotmail.com)

### 要旨

本研究では、初中級レベルのエジプト人日本語学習者の日本語の発話行為におけるポライトネスストラテジーの使用実態を観察し、学習者が日本語の談話をどのように開始し、どのように終了するかをポライトネス理論の観点から分析した。その結果、学習者の日本語レベルが高くなるにつれて、談話展開に使用されるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー（以下、PPS）の割合は高くなり、談話終了に使用されるネガティブ・ポライトネス・ストラテジー（以下、NPS）の割合は低くなることが示唆された。

キーワード: ポライトネス理論、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー

---

\* Faculty of Arts, Cairo University.

## 1. 研究目的

日本語学習者が日本人とのコミュニケーションでは、良好な人間関係を築き、お互いの文化の違いを配慮し、言葉やストラテジーを慎重に選択することが重要だと考えられる。特に、談話をどのように展開し、どのように終了するかは今後の他人との人間関係に大きな影響を与えるものと思われる。しかし、日本語学習者の談話開始と談話終了におけるポライトネス・ストラテジーに関する先行研究が管見の限り少ない。特に、エジプト人日本語学習者を対象とした研究が非常に少ないことが現状である。従って、本研究では、初中級レベルのエジプト人日本語学習者の日本語の発話行為におけるポライトネスストラテジーの使用実態を観察し、学習者が日本語の談話をどのように開始し、どのように終了するかをポライトネス理論の観点から分析する。具体的に、フェイスを脅かす行為に焦点を当て、日本語学習者が産出する談話の特徴を明確にする。

## 2. 先行研究

井上 (1996) は、日本語学習者にとってポライトネスの知識がいかに重要なのかについて以下のように述べている。

「コミュニケーションの民族詩的研究においても外国語学習者にとっても、コンテクストとの関わりにおける言語使用がもつとも多元的で複雑でとらえにくいものとなっているが、とりあえずポライトネスの現象に限定して考えれば比較的容易に、コミュニケーションが文法を超えた次元でもある種の体系性を持って成立していることが学習されうるであらう。また、ポライトネスの理解が外国語運用に必要な異文

化理解の系口にもなる」。

B&L(1987)は、フェイスの概念を引用し、ポライトネス理論を定義している。本稿では、牧原 (2019) のポライトネス理論の記述を引用する。人は誰でも社会生活を営む上で他者との人間関係に関わる基本的欲求を持つが、これをフェイスと呼ばれる。さらに、フェイスには、他者に好かれたい、受け入れられたい、という欲求であるポジティブフェイスと、自分の領域を他者に邪魔されたくないという欲求であるネガティブフェイスの 2 種類がある。この 2 種類のフェイスを脅かさないように配慮するストラテジーを「ポライトネス」と捉える。そして、「ポジティブフェイス」に働きかけるストラテジーが PPS で、「ネガティブフェイス」に働きかけるストラテジーが NPS である。

それに、それぞれのフェイスを脅かす行為は「face threatening act. 以下 FTA とする」としている。普段は、話し手と聞き手の間に行われるコミュニケーションには、FTA が生じる場合が多いが、様々な要因により、その FTA の度合いの大きさが異なる。つまり、相手との人間関係、相手の立場、目上の人なのか、目下の人か、相手との親しさ、そして、地位が高い相手かそうでないかにより、相手にかかる負担度が異なる。

### 3.調査情報及び調査対象者

日本語学習者の大学生 38 名 (1 年生、3 年生、4 年生) を対象に、アラビア語で自由記述のアンケート調査を行った。調査場面の対話相手を、日本の文化を特徴付ける上下関係と親疎関係を考慮して、「上、親、疎」の 3 種類を設定した。

アンケート調査には、それぞれの対話相手に対し、学習者がよく直面するフェイス侵害行為を考へて、依頼や誘い場面を自由に4つ書いてもらった。アンケート調査結果を踏まえた上で、多く書かれた場面を選択し、談話完成調査（以下、DCT）場面を作成した。

また、場面の内容が異なることにより、学習者が使用するポライトネスストラテジーが異なってくると考えられるため、依頼や、誘い場面を、それぞれ2つずつ設定し、異なる場面におけるポライトネスストラテジーを具体的に検討する。

<表 1> 被調査者情報

学年	調査協力者
1年生	11名
3年生	10名
4年生	12名

<表 2> DCT 調査の内容

	調査場面	場面相手
誘い場面Ⅰ.	お昼ご飯の誘い	上
誘い場面Ⅱ.	パーティーの誘い	親
依頼場面Ⅰ.	本をコピーする依頼	疎
依頼場面Ⅱ.	スナックと飲み物を買ってくれる依頼	

#### 4. 調査結果と考察

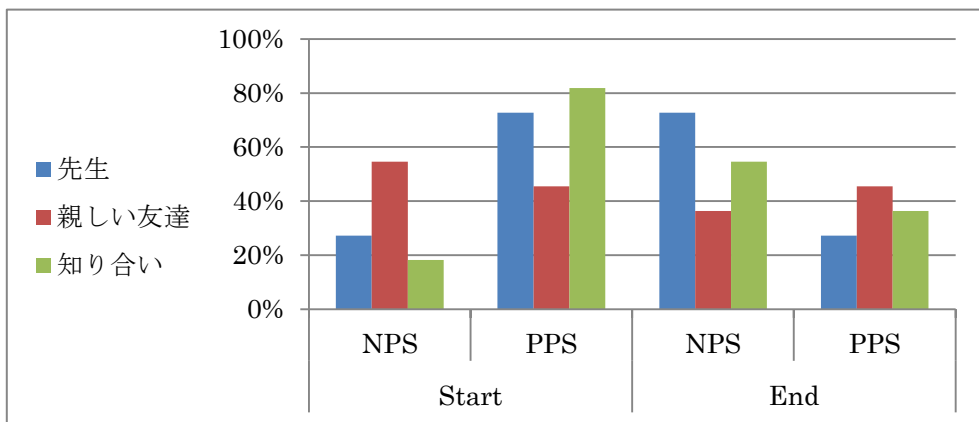
##### 4.1 1年生の日本語学習者のポライトネス・ストラテジー

1年生の学習者に行った調査の中から誘い場面Iに対する談話のデータを、ポライトネスの観点から分析する。特に、学習者が全ての相手「親・疎・上」に対し、談話展開及び、談話終了に使用したポライトネスストラテジーに焦点を当てて分析する。

以下の表は、その数値を示す。

<表3> 誘いIにおけるポライトネスストラテジーの使用率

お昼ご飯の誘い場面 - 1年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	27.27%	72.73%	72.73%	27.27%
親	54.55%	45.45%	36.36%	45.45%
疎	18.18%	81.82%	54.55%	36.36%



## 図 1 「誘い I」におけるポライトネスストラテジーの使用率

誘い場面 I では、1年生の学習者が、上の相手と、疎の相手に対し、談話を (PPS) で展開した割合は、約 8 割を占めている。一方、親の相手に対し、談話展開に (PPS) の割合は 45%で、(NPS) の割合は 55%であり、それらにはそれほど大きな差はないが、(NPS) の方が高くなっている。それに対し、談話の最後に使用されたポライトネスストラテジーを観察すると、逆に、上の相手「先生」と、疎の相手「知り合い」に対し、(NPS) の割合の方が高く、親の相手に対して、(PPS) の割合が高いことが分かる。以上まとめてみると、1年生の学習者が誘い I に対する談話では、上の相手と、疎の相手に対し、(PPS) で談話を展開し、(NPS) で終了するのに対し、親の相手に対しては、(NPS) で展開し、(PPS) で終了する傾向があることが明らかとなった。つまり、親の相手に対し、談話展開に自分のネガティブフェイスを守り、談話終了に相手のポジティブフェイスを守るが、上と疎の相手に対し、丁寧に談話を展開する方が、望ましいであろう。

次に、異なる誘い場面を見てみよう。誘い場面 II では、1年生の学習者に行った DCT 調査のデータを、ポライトネスの観点から分析し、談話の開始と終了に使用されたストラテジーを以下の表に示す。

<表 4> 誘いⅡにおけるポライトネスストラテジーの使用率

パーティーの誘い - 1 年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	9.09%	90.91%	45.45%	54.55%
親	27.27%	72.73%	72.73%	27.27%
疎	45.45%	54.55%	45.45%	36.36%

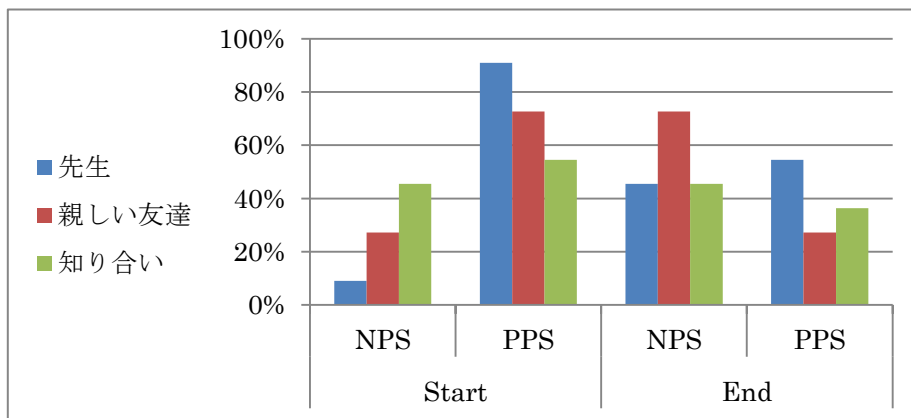


図 2 「誘いⅡ」におけるポライトネスストラテジーの使用率

誘い場面Ⅱでは、1 年生は、全ての相手に対し、談話を (PPS) で展開している。しかし、相手レベルごとに比較すると、上の相手と親の相手に対する (PPS) の割合の方が高くなっている。誘いⅠでは、親の相手に対し (NPS) で展開された談話の割合の方が高く、疎の相手に対し、(PPS) の方が高かった。つまり、誘いⅡに対する談話では、逆の傾

向が観察された。このことから、場面内容と相手が異なることにより使用されるストラテジーも異なってくると言える。そして、親の相手のパーティーの誘いは、お昼ご飯の誘いより、大切に断りにくく、拒否する際に FTA を軽減する手段が使われる。

次いで、談話の最後に使用されたポライトネスストラテジーを観察すると、上の相手に対し、(PPS) が多く使用され、疎の相手と、親の相手に対しては、(NPS) の割合は高くなっている。

1 年生の日本語学習者に行った DCT 調査の依頼場面 I のデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は、以下の表に示す。

<表 5> 依頼 I におけるポライトネスストラテジーの使用率

本をコピーする依頼 - 1 年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	54.55%	45.45%	90.91%	9.09%
親	54.55%	36.36%	72.73%	0.00%
疎	63.64%	36.36%	90.91%	9.09%



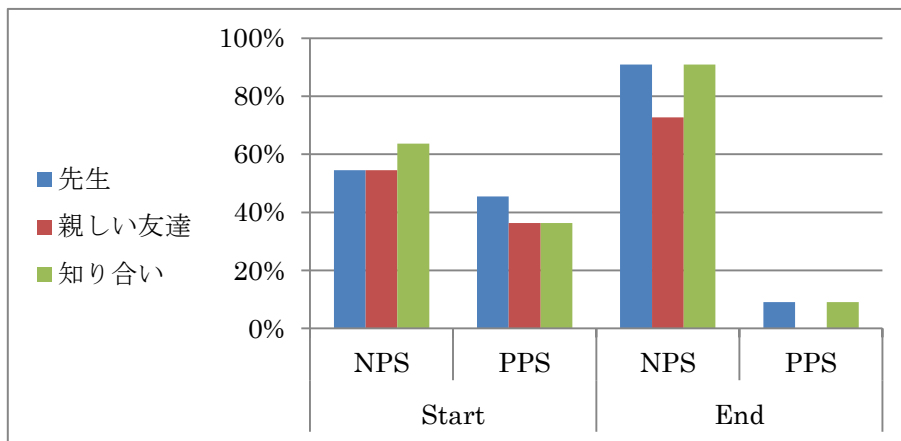


図 3 「依頼 I」におけるポライトネスストラテジーの使用率

依頼 I に対する談話では、全ての相手に対し、談話が (NPS) で展開され、(NPS) で終了された割合の方が高くなっている。このことから、1 年生の学習者にとっては、誘いより、依頼場面の方が FTA の度合いが高く、談話では相手のポジティブフェイスを脅かし、自分のネガティブフェイスを守るストラテジーが多く使用される。

1 年生の日本語学習者による、依頼場面 II のデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は以下のとおりである。

<表 6> 依頼Ⅱにおけるポライトネスストラテジーの使用率

スナックと飲み物を買う依頼 - 1年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	27.27%	72.73%	72.73%	27.27%
親	81.82%	18.18%	81.82%	0.00%
疎	45.45%	54.55%	72.73%	18.18%

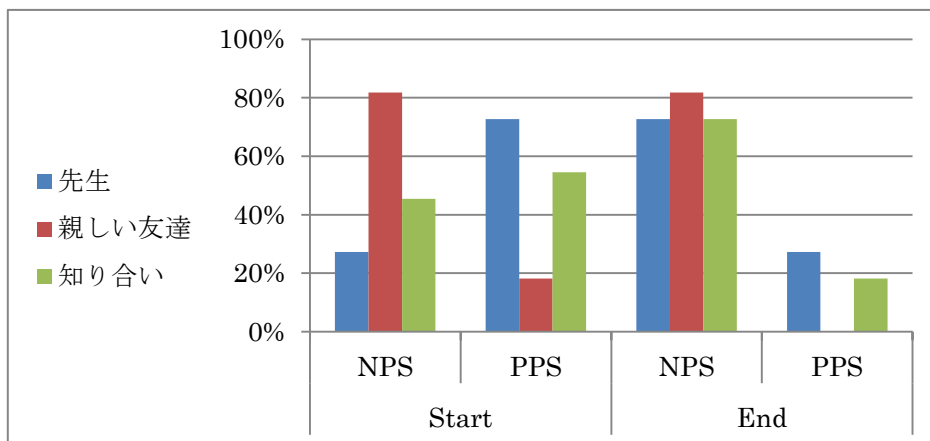


図 4 「依頼Ⅱ」におけるポライトネスストラテジーの使用率

依頼Ⅱに対する談話は、上の相手「先生」と疎の相手「知り合い」に対し、(PPS) で展開され、(NPS) で終了されている。一方、親の相手に対しては、(NPS) で談話が展開され、(NPS) で終了した割合が非常に高くなっている。そして、依頼Ⅱでは、親の相手に対し使用された (NPS) の割合は、依頼Ⅰと比較的に非常に高いことが分かった。要するに、1年生の学習者が一般的に依頼に対する談話では、全て

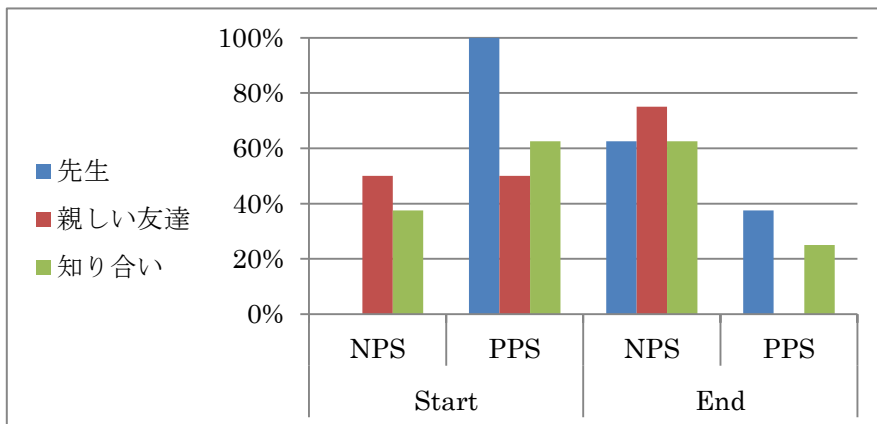
の相手に対し（NPS）で談話を終了するが、場面の内容や対話相手により、最初に使用されるストラテジーが異なると言えるだろう。

#### 4.2 3年生の日本語学習者のポライトネスストラテジー

3年生の日本語学習者に行った調査の誘い場面Iのデータを、ポライトネスの観点から分析した結果を次の表すに示す。

<表7> 誘いIにおけるポライトネスストラテジーの使用率

お昼ご飯の誘い場面 - 3年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	0.00%	100.00%	62.50%	37.50%
親	50.00%	50.00%	75.00%	0.00%
疎	37.50%	62.50%	62.50%	25.00%



## 図 5 「誘い I」におけるポライトネスストラテジーの使用率

誘い I に対する談話展開では、3 年生の学習者が、上の相手に対し、100%の割合で、(PPS) を使用している。次いで、疎の相手に対しても、(PPS) を使用された割合の方が高くなっている。一方、親の相手に対しては、(PPS) と (NPS) が、それぞれ 5 割で使用されている。それに対し、談話の最後に使用されたストラテジーは、全ての相手に対し、(NPS) の割合が高くなっている。つまり、3 年生は、談話展開には、親の相手に対して、個人差があるが、談話終了には、全ての相手に対し、FTA を行うことが多い。

以下は、3 年生の日本語学習者の誘い II のデータを、ポライトネスの観点から分析した結果を示す表である。

＜表 8＞誘い II におけるポライトネスストラテジーの使用率

パーティーの誘い - 3 年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	12.50%	87.50%	75.00%	25.00%
親	37.50%	62.50%	62.50%	25.00%
疎	37.50%	62.50%	87.50%	12.50%

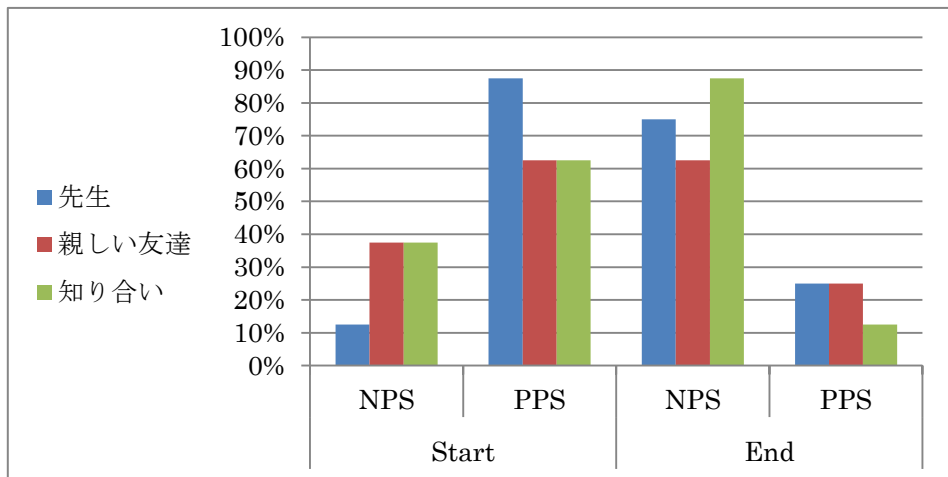


図 6 「誘いⅡ」におけるポライトネスストラテジーの使用率

上の結果から、3年生の学習者は、誘いⅡの場面に対する談話では、全ての相手に対し、談話を (PPS) で展開し、(NPS) で終了している。しかし、相手レベルごとに比較的、談話の最初に上の相手に対し、(PPS) を占める割合がもっとも高くなっている。

要するに、3年生の学習者が、誘いⅡに対する談話展開では、相手と近づくような言語表現を用い、談話の最後に自分の事情や都合を優先し、ネガティブフェイスを守るといえるだろう。

3年生の日本語学習者の依頼Ⅰのデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は、以下ようになった。

<表 9> 依頼 I におけるポライトネスストラテジーの使用率

本をコピーする依頼 I				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	50.00%	37.50%	75.00%	12.50%
親	62.50%	37.50%	75.00%	12.50%
疎	75.00%	25.00%	100.00%	0.00%

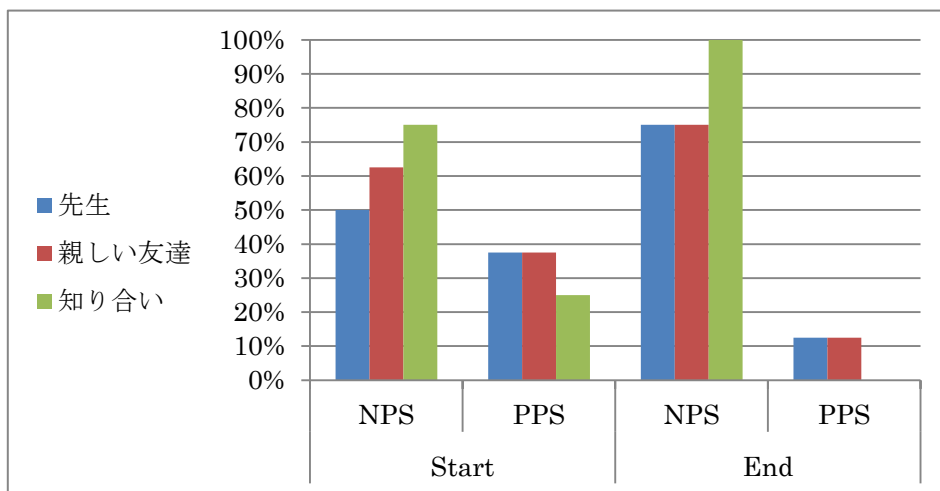


図 7 「依頼 I」におけるポライトネス・ストラテジーの使用率

依頼 I に対する場面では、3 年生の学習者は、全ての相手に対し、(NPS) で談話を展開し、(NPS) で終了している。しかし、それぞれの相手に対する割合を比較すると、特に、疎の相手に対し、使用された (NPS) の割合がもっとも高くなっている。

次に、3年生の日本語学習者の依頼場面Ⅱのデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は以下の表に示す。

〈表 10〉依頼Ⅱにおけるポライトネスストラテジーの使用率

スナックと飲み物を買う依頼				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	12.50%	75.00%	87.50%	0.00%
親	50.00%	50.00%	87.50%	0.00%
疎	25.00%	75.00%	100.00%	0.00%

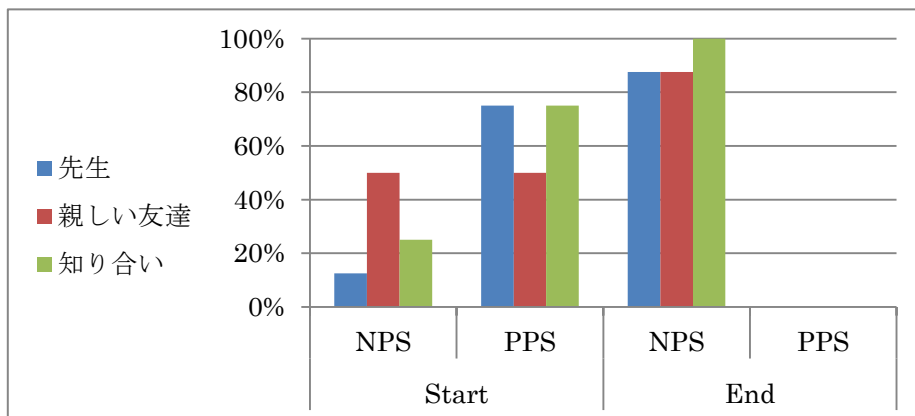


図 8 「依頼Ⅱ」におけるポライトネスストラテジーの使用率

依頼Ⅱに対する場面では、3年生の学習者が、親の相手以外は、談話を（PPS）で展開し、（NPS）で終了するという結果を得た。しかし、親の相手に対し、談話の最初に（PPS）と、（NPS）が使用された割合は5割と同様であり、個人差

があると言える。一方、談話の最後に全ての相手に対し、(NPS) が使用されている。

#### 4.3 4年生の日本語学習者のポライトネスストラテジー

4年生の日本語学習者に行った調査の中から誘い場面 I のデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は、以下の表に示す。

<表 11> 誘い I におけるポライトネスストラテジーの使用率

お昼ご飯の誘い場面 - 4年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	8.33%	91.67%	75.00%	25.00%
親	33.33%	66.67%	58.33%	33.33%
疎	25.00%	75.00%	83.33%	16.67%

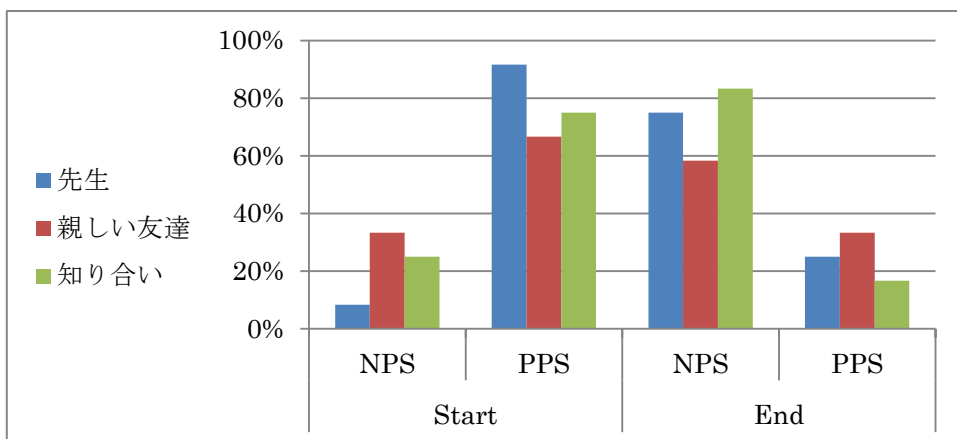




図 9 「誘い I」におけるポライトネスストラテジーの使用率

以上から分かるように、4年生の学習者が、誘い I に対する談話を、全ての相手に対し、(PPS) で展開し、(NPS) で終了している。相手レベルごとに比較すると、談話展開には、(PPS) が上の相手に対し、最も高い割合を占めている。一方、談話の最後は、それぞれの相手に対し、使用された (NPS) の割合には大きな差はない。このことから、4年生の学習者は、お昼ご飯の誘い場面では、全ての相手に対し、談話の最初及び、最後に、同様のストラテジーを使用したことが分かる。

4年生の日本語学習者の誘い II に対するデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は、以下のようになった。

<表 12> 誘い II におけるポライトネスストラテジーの使用率

パーティーの誘い場面 - 4年生				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	16.67%	83.33%	41.67%	58.33%
親	16.67%	83.33%	58.33%	41.67%
疎	0.00%	100.00%	50.00%	50.00%

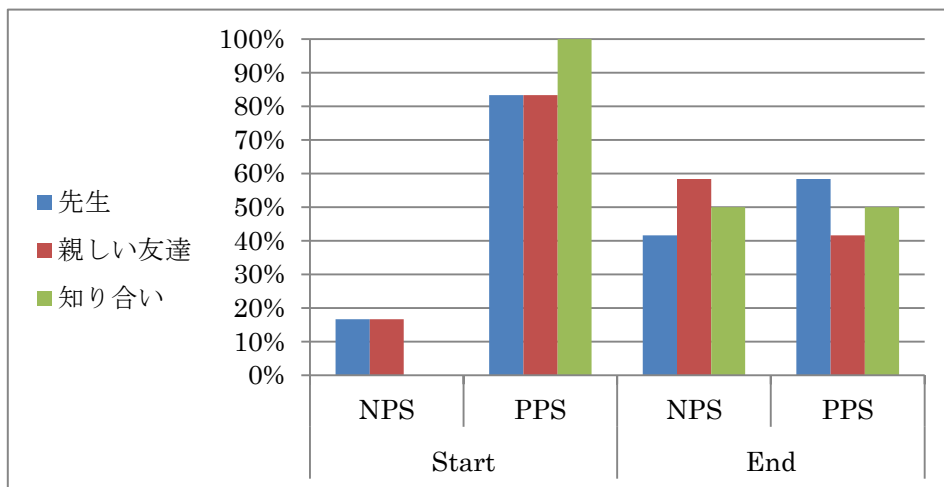


図 10 「誘いⅡ」におけるポライトネスストラテジーの使用率

誘いⅡの場面において、4年生の学習者が、全ての相手に対し、談話を（PPS）で展開した割合がもっとも高い。一方、談話の最後に上の相手に対し、（PPS）の割合の方が高く、親の相手対しては、（NPS）の方が高くなっている。しかし、疎の相手に対しては、（PPS）と（NPS）が使用された割合は同様であり、個人差があった。

4年生の日本語学習者の依頼場面Ⅰのデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は、以下のとおりである。

<表 13> 依頼 I におけるポライトネスストラテジーの使用率

本のコピーする依頼 I				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	16.67%	83.33%	66.67%	33.33%
親	58.33%	25.00%	41.67%	33.33%
疎	33.33%	50.00%	75.00%	0.00%

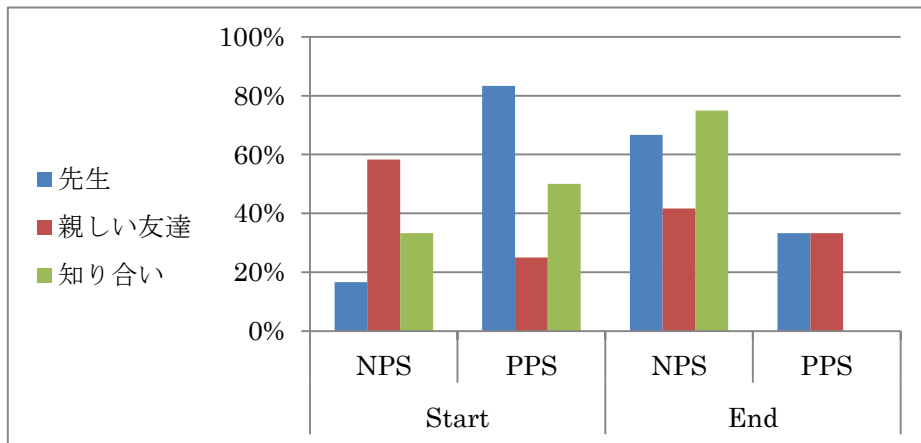


図 12 「依頼 I」におけるポライトネスストラテジーの使用率

依頼 I に対する場面では、上の相手と、疎の相手に対し、(PPS) の割合が高くなっているが、比較的、上の相手に対し、使用された割合の方が非常に高くなっている。一方、親の相手に対し、(NPS) で展開された談話が多くなっている。それに対し、談話の最後に全ての相手に対し、(NPS) が使用された割合の方が高い。しかし、比較的親の相手より、

疎の相手と、上の相手に対し使用された（NPS）の割合の方が高い。

4年生の日本語学習者の依頼場面Ⅱのデータを、ポライトネスの観点から分析した結果は以下のとおりである。

〈表 14〉依頼Ⅱにおけるポライトネスストラテジーの使用率

スナックと飲み物を買う依頼Ⅱ				
	Start		End	
	NPS	PPS	NPS	PPS
上	25.00%	58.33%	66.67%	8.33%
親	50.00%	33.33%	58.33%	8.33%
疎	41.67%	41.67%	50.00%	16.67%

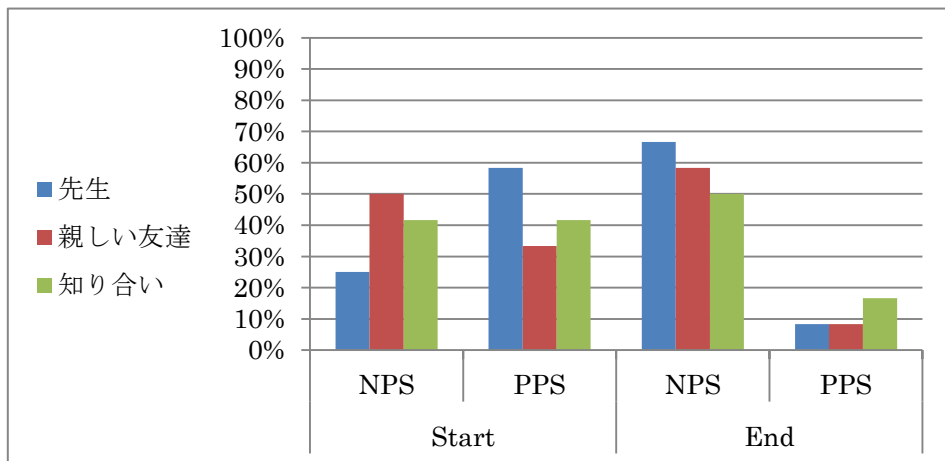


図 13 「依頼Ⅱ」におけるポライトネスストラテジーの使用率

依頼Ⅱに対する場面では、以上から分かるように、談話の展開に上の相手に対し、(PPS) が使用された割合が高いが、親の相手に対しては、(NPS) の方が高くなっている。それに対し、疎の相手に対しては、両ストラテジーが同様の割合で使用され、個人差があるということが明らかになった。一方、談話の最後に使用されたストラテジーを観察すると、全ての相手に対し、同様に (NPS) の方が高くなっている。つまり、依頼Ⅰと比較的、上の相手と、疎の相手に対し、負担が大きい依頼Ⅱでは、談話展開に使用される (PPS) の割合が低くなる。それは、負担が低い依頼の方が、実行しやすいため、断りにく感じられるからであろう。

### 5. 日本語学習者のポライトネスストラテジーの比較

1年生、3年生、4年生の日本語学習者が、誘いに対する談話と、依頼に対する談話を比較した結果は、以下の図に示す。

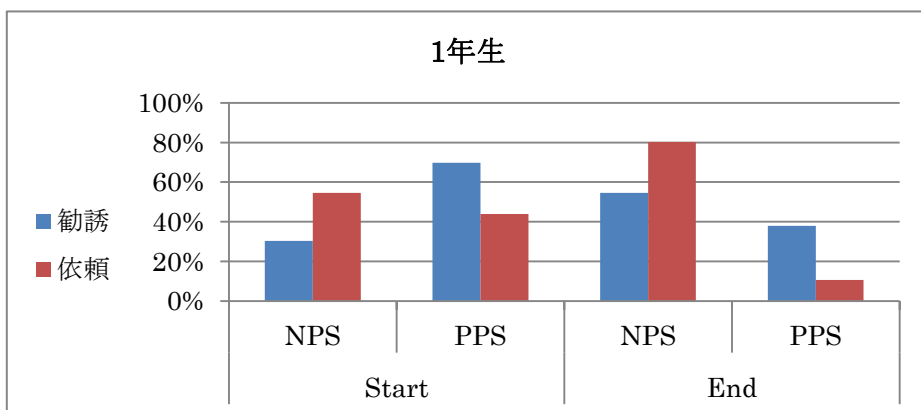


図 14 誘いと依頼に対する談話におけるポライトネスストラテジーの使用率

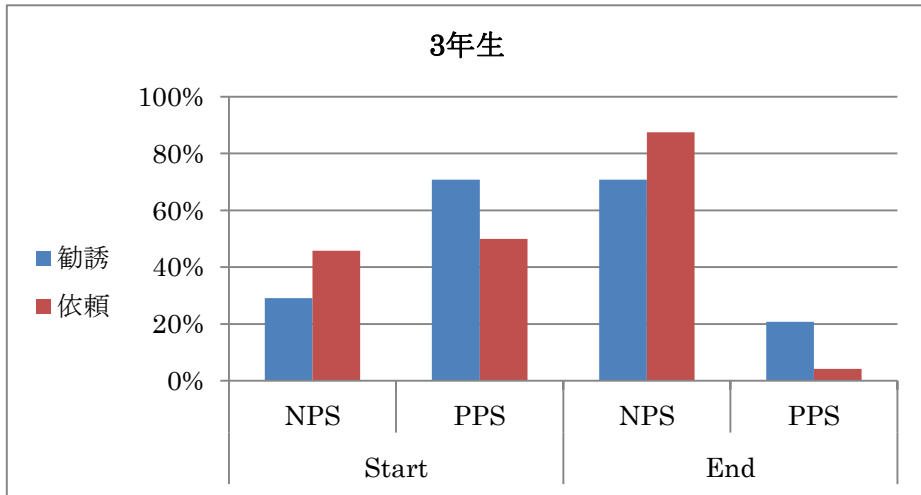


図 15 誘いと依頼に対する談話におけるポライトネスストラテジーの使用率

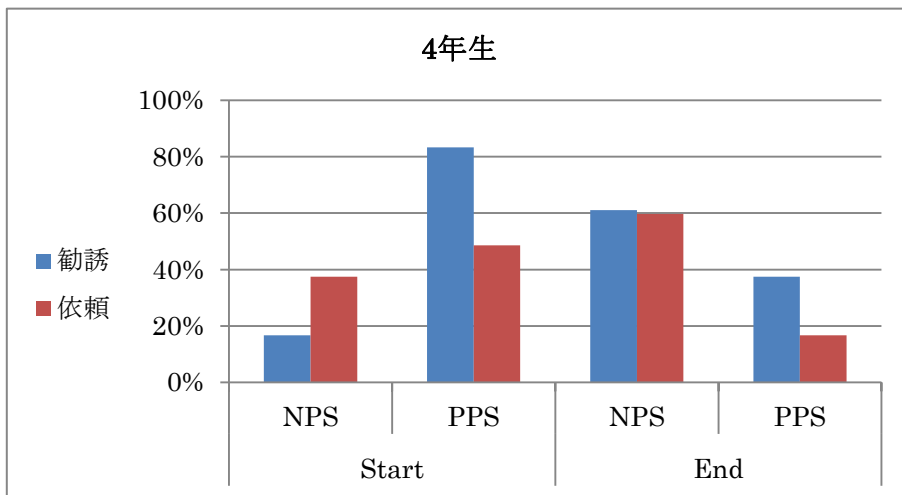


図 16 誘いと依頼に対する談話におけるポライトネス・ストラテジーの使用率

上の結果から、学習者に観察された類似点は、すべての学年では、(4年生、3年生、1年生) 依頼に対する談話より、誘いに対する談話の展開に (PPS) が使用されることが明らかとなった。一方、談話の最後には、依頼に対する場面でも、誘いに対する場面でも、(NPS) が使用される割合の方が高いことが分かった。

日本語学習者の学年ごとの相違点は、依頼に対する談話展開に、1年生は (NPS) を使用し、3年生と4年生は、(PPS) を使用することである。また、特に談話の最後に使用される (NPS) の割合は、1年生と4年生を比較すると、4年生の方が低いことが明らかとなった。

## 6. まとめと今後の課題

以上のことから、学習者の日本語レベルが高くなるにつれて、談話展開に使用される (PPS) の割合は高くなり、談話の最後に使用される (NPS) の割合は低くなることが示唆された。つまり、日本語能力が高い学習者は他者に評価されたい、好かれたいというポジティブ・ポライトネスストラテジーを使用するが、能力が限られている学習者は、邪魔されたくないというネガティブフェイスに働きかけるネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを多用することが明らかである。今後の課題として日本語学習者を対象とした意識調査を行い、日本語能力がどのように学習者が産出した日本語の

談話に影響しているかを明らかにしたい。また、調査対象者の人数を増やし、調査結果を再確認する。

さらに、以上のエジプト人日本語学習者の結果から、1年生以外は、3年生と4年生の日本語学習者は、ほぼ同様のストラテジーを使用していることが明らかとなったが、日本語能力が高い学習者には語用論的転移が生じているか否か観察したい。



## 参考文献

- 東照二 (1995) 『丁寧な英語・失礼な英語—英語のポライトネス・ストラテジー—』 研究社
- 伊藤恵美子 (2006) 「日本人は断り表現において丁寧さをどう表現しているか—長さと適切性からの分析—」 『異文化コミュニケーション研究』 18: 145-160.
- 井上逸兵 (1996) 「ポライトネスの理解と外国語学習」 教育システム研究開発センター紀要第 1 号
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1999) 『敬語表現』 大修館書店
- 金道瑛 (2021) 「他者開始におけるポライトネス・ストラテジーの場面間切り換え : 韓国語母語話者の日本語談話と韓国語談話の対照分析」 阪大日本語研究紀要第 33 号
- 近藤佐智子 (2009) 「中間言語語用論と英語教育」 『上智短期大学紀要』 29: 73-89.
- 牧原功 (2019) 「日本語教科書に見られるポライトネスストラテジー—初級教材と上級教材の比較を通して—」 日本語コミュニケーション研究論集第 8 号 15-24.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』 明治書院
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2018) 『日本語語用論入門-コミュニケーション理論から見た日本語』 明治書院
- Brown,P and S.Levinson.(1987) *Politeness*. Cambridge:Cambridge University
- Ghawi, M. (1993) Pragmatic transfer in Arabic learners of English. *El Two Talk*1(1): 39-52.
- Lakoff, R. (1973) The logic of politeness; or, minding uour P's and q's. In Paper from the ninth regional meeting of the Chicago linguistic society. Chicago: Chicago Linguistic

